

日本の大学生における「はずかしさ」の 生起に関する研究

渡 辺 弘 純

(教育心理学研究室)

岡 崎 有 希 子

(Georgetown University, Visiting Researcher)

David S. Crystal

(Georgetown University)

(平成9年9月30日受理)

A study on the emergence of shame in Japanese university students.

Hirozumi WATANABE, Yukiko OKAZAKI and David S. Crystal

問 題

Benedict (1946) は、アメリカ文化を表現する「罪の文化」に対置して、日本文化を「恥の文化」として特徴づけた。青木 (1990) は、「日本文化論」の戦後の展開過程を論じるに際して、彼女の『菊と刀』から検討を開始している。今日においても、この枠組みは、異なる文化的背景のもとでの自己 (self) の分析において、意識的であれ無意識的であれ、一つの重要な準拠枠としての役割を演じている。たとえば、公的-私的自己意識 (Fenigstein, Scheier, Buss, 1975; Fenigstein, 1987; 菅原, 1984; 辻, 1993) の対比、私的-集团的-公的自己 (Greenwald, & Pratkanis, 1984; Triandis, 1989; Trafimow, Triandis, & Goto, 1991) の区分、あるいは相互独立的-相互協調的自己観 (Markus, & Kitayama, 1991; Kitayama, & Markus, 1994; 木内, 1995) の対比なども、その一例である。

「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行なうのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行なう。恥は他人の批評に対する反応である。人は人前で嘲笑され、拒否されるか、あるいは嘲笑されたと思ひこむことによって恥を感じる。いずれの場合においても、恥は強力な強制力となる。ただし、恥を感じるためには、実際にその場に他人がいあわせるか、あるいは少なくとも、いあわせると思ひこむことが必要である。」と、

Benedict は論じる。そして、ここから、「各人は自己の行動に対する世評に気をくばること」、「他人がどういう判断を下すであろうか、ということ推測」することなど、「他人の行動の中に看取されるあらゆる暗示に油断なく心を配る」という心的特性を持つことが、日々の生活のあらゆる場面で要請されることになるのである。このような特性は、かくれたカリキュラム（恒吉，1992）を通じて形成され、日本人の「気持ち主義」（東，1994）としても、結実するのである。

彼女の提起は、文化の相対的優位性を論じたものではなく、文化的相対主義（cultural relativism）の立場から、日本文化を特徴づけたものであった。しかし、日本人にあっては、自己確立の脆弱さなど、否定的色彩を帯びた特徴づけとして、長期に渡って、克服すべき課題の提起として、映じざるを得なかった。彼女の展開の仕方は、この受け止め方を妥当なものとしているように見える。

これに対して、作田（1967）は、Benedict の対照図式を評価しつつも、「恥の文化」を再考し、新たな視点から、「恥の文化」に光を当てている。彼は言う。「われわれが恥を感じるのは、他人の拒否に出あった場合だけではない。拒否であろうと受容であろうと、われわれは他人の一種特別の注視のもとにおかれた時に恥じる」。Benedict が取り上げたのは、「公開の場の嘲りに対する反応」に限定されており、「それは恥の一つのケース、公恥（public shame）と呼ばれる側面にすぎない」。Benedict は、「恥の文化」のもう一つの側面であり、その基底層にある「羞恥」の側面を、無視した。

彼は、この批判の上に立って、「羞恥」について検討を加え、私恥（private shame）の側面を提示する。「羞恥が生ずるのは、普遍者として取扱われるはずの状況のもとで、個体として注視されたり、個体として取扱われるはずの状況のもとで、普遍者として注視を受ける時」「つまり、普遍化と個体化という二つの志向が、自己と他者のあいだでくい違う時、羞恥が生ずる」。この羞恥は、〈志向のくい違い〉のほかに、優劣の観念を伴っている。Benedict が取り上げたのは、「世間を母胎とする一定の優劣基準に照らしてわれわれが劣等であると信じている自我の一部が、白日のもとに露呈される状況であった」。しかし、羞恥が生ずる優劣基準は、「いつも所属集団に共通な基準であるとは限らない」。「所属集団を越えたもっと広い集団（たとえば階級や人類）を母胎とする優劣基準もあり、そしてこの基準が所属集団のそれと異なる場合には、前者はしばしば私的な優劣基準として自覚される」。二つの基準の間において、所属集団の基準に合致していた状況にあっても、私的な優劣基準に照らして羞恥を感じることもある。この羞恥は、公恥と区別され、私恥とでも名づけられる性質を持っている。善悪基準に立つ罪の観念が内面的制裁と同時に外面的制裁の側面を持つ（森口，1993）と同様に、恥の観念もまた両者を併せ持つ。そして、彼は、公恥が強い規制力を持つのは、競争社会である欧米文化圏も同じであると述べる。日本文化を特徴づけるのは、「公恥への恐れよりも」、「あらゆる注視に対して警戒的であるという〈志向のくい違い〉（＝羞恥）への不安である」、というのである。

作田は、さらに論を展開し、公恥と羞恥（私恥）を対比し、「羞恥」の持つ積極的側面について述べる。競争と自己顕示を鼓舞する公恥に対して、恥の羞恥の側面は、もちろん否定的側面を伴うもの（「個人の創意や自発性の表現を押さえつける」）ではあるが、「達成本位によって結びついた徒党がもちやすい集団的エゴイズムに対決するところの、一つの拠点となってきた」というのである。「羞恥」は、「自己の内部の劣等な部分が八方から透視されている人間」同士の「広汎な連帯を可能にする作用をもつ」とも続けている。このような展開は、Fromm

(1976) が、〈持つこと (having)〉と〈あること (being)〉を対比し、今日の資本主義社会を〈持つこと〉の支配する社会として批判したことを想起させる内容を含んでいる。

今日においても、欧米においては、「恥」が、否定的色彩を帯びて取り上げられている。Tangney (1995) は、恥 (shame) の体験が、行ったことの否定的評価の対象である自己 (self) についてであるのに対して、罪 (guilt) においては、自己についてではなく、行った事や行わなかった事 (thing)、すなわち行動 (behavior) へ向けられる (Niedenthal, Tangney, & Gavanski, 1994) と区分する Lewis (1971) を引いて論を展開している。恥の経験は、他者による自己の評価への関心を含んでいるのに対して、罪の経験は、自分の他者に対する影響への関心を含んでいるとも述べる。そして、罪が他者へ向けられた共感 (empathy) を育てるのと対照的に、恥は他者へ向けられた共感とは両立することができず、自己へ向けられた個人的な痛みを育てる、という (Tangney, 1991 : Tangney & Fischer, 1995)。さらには、罪が責任感などの道徳的な感情を引き起こすのに対して、恥は怒りや敵意などの感情へと導いていく、と述べるのである。

わが国において、作田以後も、恥についての検討が行われている。井上 (1977) は、「〈世間の眼〉から自分をはじめるという独特の社会心理を、わが国の人びとの多くは、個人の内面につちかってきた。」「私のうちなる世間体の解明をつよく願いつづけてきた。」との立場から、恥の文化に接近し、Benedict の指摘を評価した上で、作田を引き継ぎ、Benedict の問題点を明らかにして、恥の内実へのさらなる検討を試みている。

彼は、Benedict の問題点として、作田の論を受けて、①「恥の文化」は「罪の文化」より低次の文化であることが暗黙の前提とされていること、②「恥」は「外面的制裁 (external sanction)」であり、「罪」は「内面的制裁 (internal sanction)」であるとする定義が適切でないこと、③ Benedict は、「羞恥」の側面を捨象していること、の三つをあげる。その上で、作田の論を発展させ、三種の「はじ」の類型を提出している。第一の「はじ」は、公恥であり、「行為主体の『自我理想』にもとづく〈比較機能〉によって、かれが、かれ自身を『所属集団』の内部における『劣位者』として認知し、他者の〈まなざし〉を介して、『所属集団』から孤立している自己を見出したときに覚える『恥』の意識である」。第二の「はじ」は、私恥であり、「かれの『自我理想』によって、〈かくありたい自己〉(理想的自己) とくらべれば、〈である自己〉(現実的自己) が『劣位者』であると認知されたとき、かれはかれ自身を、あたかも他者がかれを見つめるかのごとくに見つめることにより、ひとりひそかに覚える『恥』の意識である」。第三の「はじ」は、羞恥であり、「かれの『所属集団』とかれの『準拠集団』とのあいだに認知志向のズレが生じ、他者の〈まなざし〉を介して、それが意識化されたときに覚える『は(羞)じらい』の意識である」。たとえば、一人だけ立派な服装をしているといったような、「劣位者」として認知されない状況にもかかわらず生じる「はじ」である。第一と第二の「はじ」の相違は鮮明であるが、井上は、両者とも「自我理想」を基底としており、「比較機能」と密接な関係を持っている点では、一致している、と述べている。ただし、第二の「はじ」は、「罪」に限りなく近いということも可能である。第三の「はじ」は、「公恥」や「私恥」とは、構造上、本質的に異なるものであるとされている。

井上にあっても、恥の持つ積極的側面が指摘されている。しかし、日米で異なる恥の位置づけは、わが国における「私恥」を、米国では「罪」と区分しているのではないか、あるいはまた、言語の持つ守備範囲の相違という地点から検討する必要もあると考えられる。ただし、い

ずれにしても、わが国においては、たとえ「私恥」であっても、自己 (self) と密接に関わっている意識であることは確かである。

このような理論的検討に対して、恥に関する実証的検討あるいは心理学的検討は、園原 (1934) を例外として、わが国においては、全く行われてこなかった。しかし、最近になって、shyness を取り上げた Zimbardo (1977) などの欧米の研究にも刺激されて、少数の研究者によってではあるが、精力的に検討されるようになってきている (橋本・清水, 1981; 菅原, 1989; 堤, 1989; 成田・寺崎・新浜, 1990; 成田, 1993など)。

ただし、恥あるいは「はずかしさ」の概念規定は、必ずしも、明確ではなく、研究者によって、異なっているのが実状である。たとえば、成田 (1993) は、「欧米での羞恥に関する研究は、“embarrassment”, “shyness”, あるいは “social anxiety” の名の下に行われることが多い。これらの定義も様々であるが、本論文の中ではこれらの感情の状態は、羞恥と同じであるものとして考える」と記されている。われわれは、それぞれに対応する多数の研究報告がある現状を踏まえて、これらの用語の明確な概念規定とその区分が必要であると考え。しかし、この研究では、本格的な概念規定の議論を留保し、別の検討の機会に譲ることにして、差し当たり、次のような区分を採用しておくことにする。恥あるいは「はずかしさ」として、shame の用語を対応させる。すなわち、Benedict や作田や井上の「罪と恥」パラダイムにおける恥を問題にする。米国を中心にして、近年盛んに研究されている shyness は、「はずかしがり」や「内気」や「引っ込み思案」や「はにかみ」などの個人の性格特性をあらわすものとし、shame は、これと密接に関係してはいるが、一応性格特性とは切り離された、より場面や状況によって引き起こされる傾向の強い感情として区分する。実際、Zimbardo (1977) や Cheek & Buss (1981) や相川 (1991) や飯塚 (1995) らは、この意味で、shyness を用いている。また、成田ら (1990) は、Edelmann (1985) などを引き、embarrassment を取り上げているが、embarrassment と shame も区分しておく必要があると考える。embarrassment の訳としては、暫定的に「当惑」を当て、恥や「はずかしさ」と区別する。人々の反応を引き起こす場面の側から接近すると、shame と非常に似ている側面を持っているが、より認知的色彩の濃い状態を指すものとする。すなわち、どのような振る舞い方をするかに迷う状態であって、困った状態そのものに近いのが「当惑」であり、より強く自己 (self) に受け止められて、その表現としてあらわれるのが「はずかしさ」であるとする。なお、米語の一般の辞書 (Webster's New World Dictionary of American English-Third College Edition, 1988) では、「はずかしさ (shame)」は、「自分自身あるいはその他の不適切な行動や無能さなどのために、他者の敬意を失ったつらい気持ち (a painful feeling of having lost the respect of others because of the improper behavior, incompetence, etc. of oneself or another)」として、「困惑させる (embarrass)」は、「意識過剰の、困惑した、落ち着かない気持ちを引き起こすこと (to cause to feel self-conscious, confused, and ill at ease)」として、それぞれ、説明されている。ここでは、用語の定義の問題は、以上に留めて、実証的研究の一端を紹介しておくことにする。

堤 (1989) は、自由記述から求めた羞恥感情生起場面 (堤, 1983) をもとに、31項目からなる羞恥傾性尺度を構成して大学生に実施し、因子分析を行っている。彼は、第1因子「眼差し」の意識因子、第2因子否定的評価因子、および第3因子当惑感因子の3つの因子を抽出している。ただし、尺度間の相関も比較的高いことから、未分化で単一因子的な性格を有するとも述

べている。各因子を構成する項目を検討すると、井上の「はじ」の区分に従えば、第1因子は、「私恥」と「羞恥」が、第2因子は、「公恥」が、第3因子は、「羞恥」が、それぞれ、対応しているといえることができる。あるいは、第3因子は、堤の名称に沿って、井上らの区分にはない「当惑 (embarrassment)」という区分を当てる必要があるかもしれない。「当惑 (embarrassment)」についていえば、わが国における羞恥感情の継続的研究の端緒でもある橋本 (1980) の研究は、Sattler (1965) の「当惑 (embarrassment)」研究に刺激されたものであるともいえる。

成田・寺崎・新浜 (1990) は、大学生と看護学校生を対象に、自分が羞恥を経験した具体的状況を自由記述させる方法によって、羞恥を引き起こす状況を収集した上で、120項目からなる状況別羞恥感情質問紙 (Situational Shyness Questionnaire: SSQ) を作成して、大学生に実施した。そこでは、因子分析によって、4つの因子が抽出されている。第1因子は「かっこ悪さ」の因子、第2因子は「気はずかしさ」の因子、第3因子は「自己不全感」の因子、および第4因子は「性」の因子、と命名されている。第1因子、第2因子、および第3因子は、それぞれ、井上のいう「公恥」、「羞恥」、および「私恥」とびったり対応している。第4因子の「性」の因子が、ここで抽出された特別な因子である。後に行われた成田 (1993) の共分散分析による検討によれば、全体を特徴づける広義の「羞恥 (Shyness)」は、「恥の意識」と「コミュニケーション不安」に大別され、さらに、「恥の意識」の下位因子として、「かっこ悪さ」(公恥) と「自己不全感」(私恥) があり、「コミュニケーション不安」の下位因子として、「対人緊張」や「性」や「照れ・はにかみ」(井上のいう狭義の「羞恥」) がある、と考えることもできる。

この研究においては、これらの実証的研究を受けて、調査対象者の側から見た「はずかしさ (shame)」をその生起する場面から検討することを研究の目的とする。

既に見てきた通り、羞恥感情を引き起こす状況については、わが国においてもいくつかの研究が報告されている。したがって、屋上屋を重ねる可能性がある。しかし、従来の研究における質問項目は、いずれも状況文に限定されている。われわれは、同じ状況においても、異なる種類の「はずかしさ」を感じることもある。たとえば、「叱られたとき、はずかしかった」場合、①自分だけが叱られたから、所属集団の基準に照らして、はずかしいのか (公恥)、②叱られるようなことをしてしまった自分が、私的基準に照らして、情けなかったからか (私恥)、③叱られた場面において、友だちがみんな自分のことを注視したからであるのか (羞恥)、状況文だけから、必ずしも明確に区分できない。そこで、ここでは、まず最初、「どのような状況で」、「なぜはずかしいと感じたか」の両方について、自由記述の質問紙によって問うことから始めることにした。自由記述の質問紙から開始したもう一つの理由は、一連の長期的研究の一部として、われわれ自身の手になる基礎資料を得る目的があった。次に、自由記述調査への回答の分類基準を作成し、この分類基準によって各回答を分類した上で、「はずかしさ」の生起に関する質問紙調査の項目を選定して、大学生を対象に調査を実施する。最終的には、この回答にもとづいて、「はずかしさ」尺度を作成する。この尺度と、「はずかしさ」と密接に関連していると考えられた Fenigstein ら (1975) の「自己意識尺度」や独自に作成された「他者志向性尺度」との相関が求められ、その妥当性についても、一定の検討が行われる。なお、「はずかしさ」尺度を構成する質問項目について、1つの質問項目のなかに2つ内容が含まれることになる。一般には、このような質問項目の作成の仕方には問題があるとされるかもしれな

い。しかし、われわれは、「はずかしさ」のような尺度に関して、2つの内容を含む項目によって試行することは許容されるのではないかと考える。

予 備 調 査

1. 目 的

「はずかしさ」尺度の前提として、「どのような状況で」、「なぜはずかしいと感じたか」の両方について、大学生から自由記述による回答を得て、これを吟味することを通じて、「はずかしさ」の生起する多様な状況と理由の分類カテゴリーを求める。

2. 方 法

(1) 調査対象者と調査時期

地方の国立大学教育学部の大学生110名（男子34名、女子76名）を対象に、1995年7月に調査を実施した。

(2) 調査の内容

「人は、時に自分の行動や言動に対して、あるいはある状況に陥ったときに、『はずかしい』と感じることがあると思います。あなたが日常生活の中で、どんなときに『はずかしい』と感じる、あるいは感じたか、その場面を3つあげてください。次に、なぜ、そのとき『はずかしい』と感じる（感じた）かについて述べてください。」という自由記述の質問紙を配布して、回答を求めた。すなわち、日常生活において、「どんなときに」はずかしいと感じる（感じた）か、「なぜ」そのときはずかしいと感じる（感じた）か、という2種類の質問を3回繰り返してきき、自由記述による回答を得た。

3. 結果と考察

「なぜそのとき『はずかしい』と感じたか」に焦点を当てて、分類基準（分類カテゴリー）を作成した。その結果、Table 1 に示される10の分類カテゴリーが得られた。なお、記述内容の分類カテゴリーについて、明確な性差は見られなかった。

カテゴリー①〈他人とのずれ〉は、周囲の人と自分が違うことを意識したために生じたはずかしさである。カテゴリー②〈比較〉は、ずれとは異なり、他人と比較して劣っている、または優れているからはずかしいと感じている場合である。カテゴリー③〈自分と自分とのずれ〉は、本来の自分からは考えられない意外性のある行動をしてしまったときに生じるはずかしさである。カテゴリー④〈自分自身による他人のマイナス面への反応〉は、他人の否定的な面を見て自分まではずかしくなるといった場合である。カテゴリー⑤〈自分自身による自分のマイナス面への反応〉は、自分自身の否定的な行動や言動や態度に対して、自分自身を反省したり、見つめ直して、はずかしいと感じる場合である。カテゴリー⑥〈他人による自分のマイナス面への反応〉は、自分の否定的な面を見て、他人がどう思うかを意識したときに生じるはずかしさである。カテゴリー⑦〈自分自身による自分のプラス面への反応〉は、たとえば、ほめられたときはずかしいといったような、自分のプラス面に直面して生じるはずかしさである。カテゴリー⑧〈他人による自分のプラス面・ありのままへの反応〉は、自分のプラス面やありのままに対して、他人を意識することによって生じるはずかしさである。カテゴリー⑨〈注視〉

Table 1 当初の分類カテゴリーと記述例

カテゴリー	記述例
①他人とのずれ	<ul style="list-style-type: none"> ・他人と違う行為をしたことが、はみ出た行為であると自覚するため。 ・自分の意見が他の人と違っていたら、恥ずかしいから。
②比較	<ul style="list-style-type: none"> ・自分だけが常識から外れていたり、考え方が人より劣っていると思うから。 ・人と比べて、スタイルが悪いから。
③自分と自分とのずれ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は本当はこうじゃないんだとおもっているから。 ・人前で泣くということはめったにないから。
④自分自身による他人のマイナス面への反応	<ul style="list-style-type: none"> ・他人の行動を見て、あきれてしまって、こちらが恥ずかしくなる。
⑤自分自身による自分のマイナス面への反応	<ul style="list-style-type: none"> ・そんなことをしてしまった自分が恥ずかしくなる。 ・自分のことはおいて、他人のことを悪く言った自分が情けないから。
⑥他人による自分のマイナス面への反応	<ul style="list-style-type: none"> ・他人に、ばかにされたと思ったから。 ・相手が自分のことを見下したんだろうな、と思ったから。
⑦自分自身による自分のプラス面への反応	<ul style="list-style-type: none"> ・うれしいのだが、どうしても恥ずかしくなってしまう。
⑧他人による自分のプラス面・ありのままへの反応	<ul style="list-style-type: none"> ・ほめられたとき嬉しいが、他人がどう思ったかを感じると恥ずかしくなる。
⑨注視	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの人に見られることに慣れていないから。 ・目立ったから。
⑩情動	<ul style="list-style-type: none"> ・不安 ・緊張

は、実際にだれかに見られることによって生じるはずかしさであり、見られているような気がするからはずかしいなど、想像している場合は含まない。カテゴリー⑩〈情動〉は、不安だから、緊張したからなどの気持ちに伴って生じるはずかしさである。

調査対象者から得られたすべての回答について、上述の10種類のカテゴリーについて分類を行った後、この分類の信頼性を検討するために、主分類者以外に、他の2人の分類者（心理学研究者と大学院生）による分類を行い、分類の一致率を算出した。その結果、2者間の一致率は、それぞれ、70%、67%、および63%であり、3者間の一致率は、55%であった。分類の一致率が高いとはいえ、分類カテゴリーを再検討する必要性が生じた。

当初、分類を行う場合、「なぜ、そのときはずかしいと感じたか」だけに焦点を当てた。そこで、次には、「どのようなときに、はずかしいと感じたか」についての記述も併せて分類を行うことに変更した。また、分類カテゴリーが細分化されすぎていて、カテゴリー間の相違が必ずしも明確でない場合が見られたため、分類カテゴリーを再検討して、少数のカテゴリーに統合した。その結果、Table 2 に示される5つの分類カテゴリーに収束した。

カテゴリー①〈比較〉は、他人と自分を比べて、劣っているからはずかしいといった場合である。カテゴリー②〈自省〉は、自分自身が自分の否定的な面を内省して、はずかしいと感じる場合である。カテゴリー③〈他者（他者の自分のマイナス面への反応）〉は、自分の否定的な面について、他人がどう思ったかを意識したとき生じるはずかしさである。カテゴリー④〈注

Table 2 改訂された分類カテゴリーと記述例

カテゴリー	記 述 例	
	どんなとき	な ぜ
① 比較	図画工作の授業で下手な絵を提出するとき。 ミニスカートをはいていて、鏡の中に自分の姿が見えたとき。	努力しても報われず、他の人と比べてずいぶん下手だから。 私は足が太いから。周りの皆と比べて。
② 自省	他人に申し訳ないことをしてしまったとき。 授業に遅刻して遅れて入ったとき。	そんなことしてしまった自分がはずかしくなる。 当たり前前のが出来なくて、先生にも失礼なので。
③ 他者	人と話をしているとき、勘違いをして的外れな事を言ったとき。 人前で、思いっきりこけたとき。	話をしていた相手に教養のない知ったかぶりをした奴だと思われたと思ったから。 周りの人に、おっちょこちょいな人だと感じられたのではないかと思ったから。
④ 注視	音楽の歌のテストのとき、みんなの前で、2人で歌ったとき。 人前でどじをふんではじをかけたとき。	緊張しすぎて足がふるえ、声もふるえたのを皆に見られたから。 みっともないところを見られてしまったと思ったから。
⑤ 秘密	自分の本心（何かずるいことを考えていたり）があからさまになったとき。 好きな人に自分の気持ちがばれてしまったとき。	自分の本心が人に知られるから。 知られたくなかったから。

視〉は、実際にだれかに見られたり、見られていることを想像したときに生じるはずかしさである。カテゴリー⑤〈秘密（内に秘めていたことの露見）〉は、日記を読まれたときなど、他人に隠しておきたいことが周囲に知られてしまったときに感じるはずかしさである。井上（1977）の「はじ」の分類と対応させると、〈比較〉と〈他者〉は「公恥」に、〈自省〉は「私恥」に、〈注視〉と〈秘密〉は「羞恥」に区分される。また、成田ら（1990）に対応させると、〈比較〉と〈他者〉は「かっこ悪さ」の因子に、〈自省〉は「自己不全感」の因子に、〈注視〉と〈秘密〉は「気はずかしさ」の因子に相当する。彼らが見出した「性」の因子に相当するものがここでは現れていないが、あるいは、自由記述による調査であるため表出が抑制されたのかもしれないし、〈秘密〉のなかに包含されるのかもしれない。いずれにしても、従来の研究を支持する結果が得られたといえることができる。

調査対象者から得られたすべての回答について、上述の5つの分類カテゴリーにもとづいて分類した後、この分類の信頼性を検討するために、当初の分類と同様、三者による分類を行いその一致率を求めた。二者間の一致率は、それぞれ、90%、80%、および81%であり、平均して84%となった。また、三者間の一致率は、76%であった。一応の一致率が確認されたので、この分類を採用することにした。

Table 3 は、性別に、それぞれのカテゴリーに相当する回答を行った人数を示したものである。

なお、一人につき3回回答を求めているため、5つのカテゴリーのどれかに相当する回答を

Table 3 各分類カテゴリーに回答した人数とその割合

カテゴリー	全体 (N=110)	男子 (N=34)	女子 (N=76)
比較	16 (14.5%)	6 (17.6%)	10 (13.2%)
自省	55 (50.0%)	19 (55.9%)	36 (47.4%)
他者	56 (50.9%)	18 (52.9%)	38 (50.0%)
注視	77 (70.0%)	20 (58.8%)	57 (75.0%)
秘密	16 (14.5%)	6 (17.6%)	10 (13.2%)
その他	4 (3.6%)	1 (2.9%)	3 (3.9%)

1回でもしていれば、そのカテゴリーに相当する回答をした（一人）とし、1つのカテゴリーに2回以上回答していても、一人と数えた。Table から明らかなように、〈注視〉について記述している割合が最も多く、全体の70%（男子58.8%、女子75%）を占めていた。このことから、大学生は、視線を浴びる場合、すなわち他人に見られていたり、見られているかもしれないと意識した場合に、はずかしいと感じる傾向が強いといえることができる。また、男子と女子を問わず、ともに、〈比較〉や〈秘密〉に比べて、〈注視〉や〈他者〉や〈自省〉を記述した者の割合が高いことがわかる。さらに、男子においては、〈注視〉と〈他者〉と〈自省〉を記述した者の割合がほぼ同じであるのに対して、女子においては、〈他者〉や〈自省〉に比べて〈注視〉を記述した者の割合が高いのも特徴的であった。〈注視〉カテゴリーの人数の性差は、統計的にも傾向が認められた ($\chi^2=2.93$, $df=1$, $P<.1$)。すなわち、女子の方が、男子よりも、他者の視線やまなざしに対してはずかしさを感じる傾向が強いといえることができる。これは、堤 (1989) と一致しているともいえる。

調 査

1. 目 的

予備調査で求められた「はずかしさ」の生起に関する分類カテゴリーおよび自由記述の回答内容をもとにして、「はずかしさ」尺度を作成する。その上で、この「はずかしさ」尺度の構成概念的妥当性について検討する。

2. 方 法

(1) 調査対象者と調査時期

地方の国立大学教育学部、理学部、工学部の大学生、200名（男子99名、女子101名）を対象に、1996年1月、2月、4月に、調査を実施した。

(2) 調査内容の構成

①「はずかしさ」尺度：予備調査で、分類カテゴリーとして採用された〈比較〉、〈自省〉、〈他者〉、〈注視〉、および〈秘密〉に、〈ずれ（自分だけ周囲と違うことをするとき生じるはずかしさなどの自分と他者とのくい違いによるもの）〉と〈投影（自己と関わりのある他者の否定的な面があたかも自己の否定的な面であるかのように感じることから生じるはずかしさ）〉を加えて、7つのカテゴリーを設定することにした。付加された〈ずれ〉と〈投影〉は、当初の10の分類カテゴリーには含まれていたが、当初の分類カテゴリーの信頼性が低かったために回

答数が少ないという理由で削除されたカテゴリーである。

予備調査における自由記述の回答内容を参考にして、各カテゴリーについて8項目ずつ、計56項目を、「はずかしさ」尺度を構成する項目として、独自に作成した。項目内容は、「人を見間違えて声をかけたとき、自分の軽率さがはずかしい」などである。この例で明らかのように、ここで作成された項目は、基本的には、「～したとき」という場面と、「～なので」という理由の2つが組み合わされており、理由の記述内容が各カテゴリーを説明したものになっている。評定は、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階で行われた。

②自己意識尺度：Fenigsteinら（1975）の自己意識尺度をもとにして、菅原（1984）が作成した「公的自己意識」尺度（11項目）と「私的自己意識」尺度（10項目）に加えて、もともとの自己意識尺度に含まれていた「対人不安」尺度（6項目）を独自に日本語訳して使用した。評定は、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの7段階で行われた。これらの尺度は、「はずかしさ」尺度の妥当性を検討すると同時に、「はずかしさ」についての考察を深める素材として活用した。

③他者志向性尺度：作道（1995）は、恥意識尺度を作成している。その項目内容は、「世間体をいつも気にして、他人と自分を比較してしまう」、「人前で自分の意見をはっきりと述べることには抵抗がある」などである。作道はこれを恥意識と名付けているが、われわれが作成した「はずかしさ」尺度とは異なっており、より抽象度も高い。その項目内容の検討から、他者志向性尺度（15項目）と命名する方が適切であると考え、この名称によって、この研究で用いることにした。評定は、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階で行った。この尺度もまた、「はずかしさ」尺度の妥当性を検討すると同時に、「はずかしさ」についての考察を深める素材として活用した。

3. 結果と考察

(1) 「はずかしさ」尺度の検討

①項目分析と最終的な「はずかしさ」尺度の作成：暫定的に作成された56項目について、回答の「非常にあてはまる」に5点、「どちらかといえばあてはまる」に4点、「どちらともいえない」に3点、「どちらかといえばあてはまらない」に2点、「全くあてはまらない」に1点を与えて得点化した。項目得点が高ければ、はずかしさが強いことを示している。「はずかしさ」尺度を構成すると考えられた56項目の項目内容、平均得点、および標準偏差を示したのが、Table 4である。平均得点が最も高い項目は、「人に日記を読まれることは、はずかしい」〈秘密〉で、次いで、「道で転んだとき、大勢の人に注目されたので、はずかしい」〈注視〉、「授業中寝ていて、起きるひょうしに大きな音を出して、周りの人に笑われたとき、はずかしい」〈他者〉、「人を見間違えて声をかけてしまったとき、自分の軽率さがはずかしい」〈自省〉、「場違いな服装で正式なパーティーに行ったとき、人の視線が気になり、はずかしい」〈注視〉であった。また、平均得点の最も低い項目は、「食事に行って、一人だけ違うメニューを選ぶのは、はずかしい」〈ずれ〉で、次いで、「自分の趣味が、友達と違っているとき、はずかしい」〈ずれ〉、「仲の良い友達が、間違っただけを言っていると、はずかしい」〈投影〉であった。大学生は、自分の否定的な面が露呈したときや他者の視線を意識したときに、より強くはずかしいと感じ、他者と単に相違するという状況では、はずかしさをあまり感じない、ともいえる。

この56項目の得点について、主因子法による因子分析を行った。因子分析の結果、固有値1

日本の大学生における「はずかしさ」の生起に関する研究

Table 4 当初の「はずかしさ」尺度の項目内容, 平均, 標準偏差

項目内容	全体(N=200)		男子(N=99)		女子(N=101)	
	M	SD	M	SD	M	SD
A01 何をしても、人の倍以上時間がかかるとき、はずかしい。	3.38	1.24	3.23	1.35	3.51	1.11
A02 人を見間違えて声をかけてしまったとき、自分の軽率さが、はずかしい。	4.14	1.01	3.94	1.10	4.34	.89
A03 間違った言葉の使い方を他人から注意されたとき、ばかにされたようで、はずかしい。	3.43	1.24	3.38	1.34	3.49	1.15
A04 道で転んだとき、大勢の人に注目されたので、はずかしい。	4.22	1.02	3.97	1.14	4.46	.82
A05 好きな人に自分の気持ちが分かってしまったとき、はずかしい。	3.30	1.33	3.01	1.37	3.57	1.24
A06 スポーツの試合で、自分の所属する大学のチームが大差で負けたとき、はずかしい。	2.09	1.14	2.16	1.24	2.02	1.02
A07 会議や討論の場で誰も発言しないのに自分が発言するのは、はずかしい。	3.06	1.26	2.94	1.28	3.19	1.23
A08 家庭の状況が、他の家庭よりも劣っていると感じる時、はずかしい。	2.58	1.25	2.26	1.18	2.88	1.25
A09 人を傷つけてしまったとき、人の気持ちになって考えることが出来なかった自分が、はずかしい。	3.73	1.06	3.64	1.10	3.81	1.01
A10 追試のために掲示板の学生呼び出しの欄に名前が載ると、友達にどう思われるか気になり、はずかしい。	2.96	1.33	2.54	1.26	3.38	1.27
A11 授業で発表するとき、周囲の視線をあびるので、はずかしい。	3.11	1.26	2.96	1.27	3.25	1.24
A12 人に成績を見られることは、はずかしい。	2.61	1.23	2.29	1.15	2.92	1.22
A13 家族の一員がだらしないのを見たら、はずかしい。	2.98	1.32	2.71	1.33	3.25	1.25
A14 考え方が、その場の中で一人だけ違うと気づいたとき、はずかしい。	2.37	1.13	2.12	1.09	2.61	1.11
A15 友達より大学のレベルが低いとき、はずかしい。	2.31	1.22	2.20	1.20	2.43	1.23
A16 新聞やニュースを見ていないために、話し合いについていけないとき、自分の無知さにあきれて、はずかしい。	3.29	1.26	2.97	1.37	3.59	1.07
A17 自信を持って答えた内容が、全く見当外れのことだった時、人に見下されるような気がして、はずかしい。	3.68	1.09	3.55	1.15	3.82	1.01
A18 人前に出て歌を歌うとき、慣れていないので、はずかしい。	3.13	1.33	3.07	1.33	3.19	1.34
A19 好きな人と話をするとき、はずかしい。	2.95	1.33	2.93	1.33	2.96	1.33
A20 知人が、人に迷惑をかけていると、はずかしい。	2.97	1.17	2.81	1.27	3.14	1.05
A21 自分の趣味が、友達と違っているとき、はずかしい。	1.70	.95	1.68	1.00	1.72	.90
A22 大勢の人の前で思わず大声を出したとき、皆が自分のことを注目するので、はずかしい。	3.30	1.22	3.20	1.27	3.40	1.17
A23 人に頼り過ぎたとき、自分が独立した一人の人間ではないように思われて、はずかしい。	3.13	1.22	3.29	1.28	2.97	1.15
A24 辛いことから逃避したとき、他人にどう思われているか気になり、はずかしい。	2.93	1.19	2.94	1.19	2.92	1.20
A25 自分の発言が、友達の発言より内容が貧弱であると感じたとき、はずかしい。	3.36	1.13	3.21	1.18	3.50	1.05
A26 自分の感情を抑制出来なくて、外に出してしまったとき、はずかしい。	3.21	1.20	3.16	1.28	3.25	1.13
A27 仲の良い友達が授業に遅れて入ってきて、先生に叱られているのを見たら、はずかしい。	2.02	1.05	1.92	1.03	2.11	1.08
A28 食事に行き、一人だけ違うメニューを選ぶのは、はずかしい。	1.49	.80	1.39	.73	1.58	.86
A29 物事に取り組むとき、自分より友達が熱心に取り組んでいる姿を見ると、はずかしい。	2.27	1.07	2.16	1.05	2.39	1.10
A30 一人で鼻歌を歌って自分の世界に入っているところを見られると、はずかしい。	3.32	1.29	3.33	1.30	3.31	1.29
A31 人のいる前で親や先生に叱られたとき、みっともないので、はずかしい。	3.83	1.05	3.55	1.09	4.11	.93
A32 泳ぎにいて、水着姿を人の目にさらすことは耐え難く、はずかしい。	2.92	1.37	2.34	1.21	3.50	1.27
A33 友達に嘘をついたのがばれたとき、後ろめたい気持ちになり、はずかしい。	3.86	1.16	3.60	1.21	4.12	1.06
A34 家族の一員が、人に後ろ指を指されるようなことをしているのを見ると、はずかしい。	3.73	1.15	3.34	1.22	4.10	.93
A35 皆と一緒に出掛けるとき、一人だけ服装が異なっていると、はずかしい。	2.88	1.40	2.52	1.38	3.24	1.33
A36 自分の容姿が、人と比べて悪いと思うとき、はずかしい。	3.08	1.27	2.81	1.28	3.34	1.21
A37 外国人に英語で話しかけられて意味が分からなかったとき、自分が情けないと思、はずかしい。	2.84	1.28	2.66	1.36	3.01	1.18
A38 中間体があるので、一般的に良いと言われる所に就職出来ないと、はずかしい。	2.79	1.15	2.65	1.19	2.94	1.09
A39 授業中に寝て、皆の前を通過して席に着かなければならないとき、はずかしい。	3.16	1.31	2.81	1.31	3.50	1.23
A40 人に日記を読まれることは、はずかしい。	4.27	.99	3.90	1.13	4.62	.66
A41 日本人が外国に行き、バカげたことをしているのを見ると、はずかしい。	3.49	1.22	3.12	1.34	3.84	.96
A42 場違いな服装で正式なパーティーに行き、人の視線が気になり、はずかしい。	4.07	1.11	3.71	1.24	4.43	.84
A43 友達よりも、自分が不器用であると感じたとき、はずかしい。	2.88	1.21	2.63	1.25	3.14	1.12
A44 授業で見当外れなことを発表したとき、自分の学力のなさを感じ、はずかしい。	3.71	1.15	3.42	1.25	3.99	.95
A45 字の汚いノートを友達に貸すとき、友達が自分を雑に思うだろうと思うと、はずかしい。	2.66	1.37	2.17	1.26	3.14	1.30
A46 皆が遊んでいるときに、一人だけ勉強するのは、はずかしい。	2.05	1.10	1.97	1.07	2.13	1.12
A47 集団の中において、孤独を感じているの知られると、はずかしい。	2.57	1.26	2.34	1.23	2.78	1.26
A48 仲の良い友達が、間違ったことを言っていると、はずかしい。	2.08	1.00	1.92	.95	2.24	1.02
A49 周囲との意見が異なっているとき、自分自身の意見を強く主張するのは、はずかしい。	2.58	1.25	2.44	1.26	2.70	1.22
A50 試験の成績が友達と比べて悪いとき、はずかしい。	2.78	1.30	2.48	1.29	3.06	1.25
A51 買い物をしてお金が足りなかったとき、周囲に迷惑をかけた自分が、はずかしい。	3.81	1.11	3.71	1.15	3.90	1.06
A52 授業中に寝て、起きるひょうしに大きな音を出して、周りの人に笑われたとき、はずかしい。	4.15	.99	3.91	1.06	4.39	.86
A53 何をしても人の視線が気になり、行動にうつすことが、はずかしい。	2.69	1.20	2.62	1.20	2.75	1.20
A54 自分の本心を人にもらしてしまったとき、はずかしい。	2.65	1.25	2.65	1.28	2.65	1.23
A55 仲の良い友達が、人前で目立つことをすると、はずかしい。	1.85	.92	1.81	.95	1.89	.89
A56 自分だけが表彰されるのは、はずかしい。	2.21	1.21	2.09	1.20	2.34	1.22

Table 5 当初の「はずかしさ」尺度項目の因子分析結果と項目-得点相関

項目内容	F 1	F 2	F 3	F 4	共通性	項目-得点相関
A44 授業で見当外れなことを発表したとき、自分の学力のなさを感じ、はずかしい。	.608			.317	.502	.636
A52 授業中に寝ていて、起きるひょうしに大きな音を出して、周りの人に笑われたとき、はずかしい。	.596				.379	.576
A42 場違いな服装で正式なパーティーに行ったとき、人の視線が気になり、はずかしい。	.586				.382	.566
A31 人のいる前で親や先生に叱られたとき、みっともないので、はずかしい。	.564		.302		.431	.549
A40 人に日記を読まれることは、はずかしい。	.505				.270	.452
A34 家族の一員が、人に後ろ指を指されるようなことをしていると、はずかしい。	.492				.375	.516
A04 道で転んだとき、大勢の人に注目されたので、はずかしい。	.471		.357		.352	.498
A45 字の汚いノートを友達に貸すとき、友達が自分を雑に思うだろうと思うと、はずかしい。	.458	.345			.369	.534
A38 世間体があるので、一般的に良いと言われる所就職出来ないと、はずかしい。	.435	.335			.330	.490
A17 自信を持って答えた内容が、全く見当外れのことだった時、人に見下されるような気がして、はずかしい。	.434		.302		.343	.521
A51 買い物をしてお金が足りなかったとき、周囲に迷惑をかけた自分が、はずかしい。	.418				.298	.434
A36 自分の容姿が、人と比べて悪いと思うとき、はずかしい。	.400	.332			.376	.520
A32 泳ぎにいて、水着姿を人の目にさらすことは耐え難く、はずかしい。	.336				.191	.381
A01 何をしても、人の倍以上時間がかかるとき、はずかしい。	.333				.206	.380
A41 日本人が外国に行って、バカげたことをしていると、はずかしい。	.316				.167	.298
A48 仲の良い友達が、間違っただけを言っていると、はずかしい。		.643			.482	.567
A14 考え方が、その場の中で一人だけ違うと気づいたとき、はずかしい。		.537	.370		.485	.571
A13 家族の一員がだらしないのを見たら、はずかしい。	.367	.499			.410	.474
A46 皆が遊んでいるときに、一人だけ勉強するのは、はずかしい。		.482			.276	.397
A55 仲の良い友達が、人前で目立つことをすると、はずかしい。		.481			.377	.524
A27 仲の良い友達が授業に遅れて入ってきて、先生に叱られているのを見たら、はずかしい。		.480			.314	.448
A28 食事に行き、一人だけ違うメニューを選ぶのは、はずかしい。		.476			.253	.423
A21 自分の趣味が、友達と違っているとき、はずかしい。		.428			.283	.429
A15 友達より大学のレベルが低いとき、はずかしい。		.414			.227	.417
A12 人に成績を見られることは、はずかしい。	.332	.409			.318	.500
A08 家庭の状況が、他の家庭よりも劣っていると感じる時、はずかしい。		.394			.271	.437
A06 スポーツの試合で、自分の所属する大学のチームが大差で負けたとき、はずかしい。		.362			.181	.406
A53 何をしても人々の視線が気になり、行動にうつろい、はずかしい。		.377	.566		.499	.544
A07 会議や討論の場で誰も発言しないのに自分が発言するのは、はずかしい。			.509		.317	.466
A11 授業で発表するとき、周囲の視線をあびるので、はずかしい。			.506		.362	.550
A18 人前に出て歌を歌うとき、慣れていないので、はずかしい。			.493		.251	.384
A22 人の前で思わず大声を出したとき、皆が自分のことを注目するので、はずかしい。			.490		.392	.458
A19 好きな人と話をするとき、はずかしい。			.449		.271	.455
A05 好きな人に自分の気持ちが分かってしまったとき、はずかしい。			.391		.250	.442
A30 一人で鼻歌を歌って自分の世界に入っているところを見られると、はずかしい。			.346		.222	.317
A23 人に頼り過ぎたとき、自分が独立した一人の人間ではないと思われて、はずかしい。				.666	.458	.506
A24 辛いことから逃避したとき、他人にどう思われているかが気になり、はずかしい。				.589	.470	.487
A26 自分の感情を抑制出来なくて、外に出してしまったとき、はずかしい。				.568	.379	.495
A33 友達に嘘をついたのがばれたとき、後ろめたい気持ちになり、はずかしい。	.316			.387	.277	.438
A37 外国人に英語で話しかけられて意味が分からなかったとき、自分が情けないと思ひ、はずかしい。				.380	.255	.404
A09 人を傷つけてしまったとき、人の気持ちになって考えることが出来なかった自分が、はずかしい。				.378	.190	.397
A20 知人が、人に迷惑をかけていると、はずかしい。				.336	.235	.362
A50 試験の成績が友達と比べて悪いとき、はずかしい。	.492	.455			.471	
A10 追試のために掲示板の学生呼び出しの欄に名前が載ると、友達にどう思われるか気になり、はずかしい。	.455	.435			.446	
A25 自分の発言が、友達の発言より内容が貧弱であると感じたとき、はずかしい。	.424			.415	.401	
A16 新聞やニュースを見ていないために、話し合いについていけないとき、自分の無知さにあきれて、はずかしい。	.387			.368	.364	
A35 皆と一緒に出掛けるとき、一人だけ服装が異なっていると、はずかしい。	.371	.332			.320	
A43 友達よりも、自分が不器用であると感じたとき、はずかしい。	.415	.433		.302	.477	
A47 集団の中にいて、孤独を感じているのを知られると、はずかしい。	.355	.391			.337	
A29 物事に取り組むとき、自分より友達が熱心に取り組んでいる姿を見ると、はずかしい。		.370		.354	.293	
A49 周囲との意見が異なっているとき、自分自身の意見を強く主張するのは、はずかしい。		.373	.420		.365	
A39 授業に遅れて、皆の前を通過して席に着かなければならないとき、はずかしい。	.381		.410		.406	
A54 自分の本心を人にもらしてしまったとき、はずかしい。		.351	.383		.305	
A56 自分だけが表彰されるのは、はずかしい。		.348	.364		.337	
A02 人を見間違えて声をかけてしまったとき、自分の軽率さが、はずかしい。	.325		.326		.220	
A03 間違っ言葉の使い方をして他人から注意されたとき、ばかにされたようで、はずかしい。					.140	
固 有 値	12.760	2.404	1.890	1.507		
寄 与 率 (%)	22.8	4.3	3.4	2.7		

以上のものは、15あり、大きい順に並べると、13.40, 3.06, 2.55, 2.15, 1.73, 1.64, 1.61, 1.41などとなった。当初、7つの因子を想定していたため、7因子解でバリマックス回転を行って検討したが、必ずしも明確な因子を構成する項目のまとまりを見出すことができなかった。そこで、固有値が2以上となる4因子構造を想定し、4因子解でバリマックス回転を行った。さらに、因子負荷量が.30以上の項目を各因子を構成する項目とみなし、各因子ごとに、「項目得点」と「その項目以外の全項目の総得点」との相関係数（項目-得点相関）を算出した。なお、複数因子に負荷している項目について、各因子の因子負荷量の絶対値の差が.05以下のものは、除外している。Table 5は、これらの結果を示したものである。

各因子を構成する項目は、文章全体の内容を考慮して吟味された。項目作成の段階では、「～なので」という理由の部分によって、カテゴリ別に区分した。しかし、それでは各因子の説明がつかないため、文章全体を通して、内容を吟味することにした。

第1因子に因子負荷量の大きい項目は、「授業で見当外れなことを発表したとき、自分の学力のなさを感じ、はずかしい」、「授業中に寝ていて、起きるひょうしに大きな音を出して、周りの人に笑われたとき、はずかしい」などであり、自分の否定的な面を他者に露呈してしまったときに生じるはずかしさであると考えられる。したがって、第1因子は、〈他者〉と命名された。第2因子に因子負荷量の大きい項目は、「仲の良い友達が、間違っただけを言っていると、はずかしい」〈投影〉、「考え方が、その場の中で一人だけ違うと気づいたとき、はずかしい」〈ずれ〉であった。さらに、因子負荷量は必ずしも高くはないけれども、「友達より大学のレベルが低いとき、はずかしい」といった〈比較〉の項目も含まれていた。このように、第2因子は、一つにまとめることが困難なため、暫定的に〈投影・ずれ・比較〉と命名された。第3因子に因子負荷量の大きい項目は、「何をするにおいても人の視線が気になり、行動にうつすことがはずかしい」、「会議や討論の場で誰も発言しないのに自分が発言するのは、はずかしい」などで、自分の否定的な面には限らず、人の視線を意識したときに生じるはずかしさであると考えられる。したがって、第3因子は、〈注視〉と命名された。第4因子に因子負荷量の大きい項目は、「人に頼りすぎたとき、自分が独立した一人の人間ではないように思われて、はずかしい」、「辛いことから逃避したとき、他人にどう思われているか気になり、はずかしい」などであり、自分の否定的な面を内省したときに生じるはずかしさであると考えて、第4因子は、〈自省〉と命名された。これらは、一応の命名であり、一部に他のカテゴリと複合するものが含まれているのはいうまでもない。

4つの因子について、Cronbachの α 係数を算出したところ、第1因子（15項目）は.851、第2因子（12項目）は.813、第3因子（8項目）は.753、第4因子（7項目）は.716となった。

次に、この因子分析の結果にもとづいて、因子負荷量が大きいか、共通性が一定以上あるか（.300以上）、項目-得点相関が高いかを考慮して、〈他者〉、〈投影・ずれ・比較〉、〈注視〉、〈自省〉のそれぞれの因子に含まれる項目を、5項目ずつ選び出した。このとき、〈投影・ずれ・比較〉について、項目-得点相関の高い順に選び出された項目は、すべてが〈投影〉カテゴリに属する項目であった。このようにして、〈ずれ〉、〈比較〉、〈秘密〉を除く、〈他者〉、〈投影〉、〈注視〉、〈自省〉の4つの因子が、「はずかしさ」尺度を構成する因子として抽出された。

さらには、4つの因子を構成する項目の中から、それぞれ5項目ずつを選び出した、計20項目について、再度主因子法による因子分析を行い、4因子解によるバリマックス回転を行った。

Table 6 「はずかしさ」尺度の因子分析結果と項目一得点相関

項目内容	F 1	F 2	F 3	F 4	共通性	項目一得点相関
A42 場違いな服装で正式なパーティーに行ったとき、人の視線が気になり、はずかしい。	.672				.484	.562
A52 授業中に寝ていて、起きるひょうしに大きな音を出して、周りの人に笑われたとき、はずかしい。	.671				.469	.607
A44 授業で見当外れなことを発表したとき、自分の学力のなさを感じ、はずかしい。	.654				.530	.608
A31 人のいる前で親や先生に叱られたとき、みっともないので、はずかしい。	.519				.360	.490
A45 字の汚いノートを友達に貸すとき、友達が自分を雑に思うだろうと思うと、はずかしい。	.457		.308		.326	.409
A07 会議や討論の場で誰も発言しないのに自分が発言するのは、はずかしい。		.664			.475	.470
A11 授業で発表するとき、周囲の視線をあびるので、はずかしい。		.634			.469	.550
A53 何をするにおいても人の視線が気になり、行動にうつすことが、はずかしい。		.503			.383	.503
A22 大勢の人の前で思わず大声を出したとき、皆が自分のことを注目するので、はずかしい。		.460		.326	.401	.447
A19 好きな人と話をするとき、はずかしい。		.428			.256	.402
A48 仲の良い友達が、間違っただけを言っていると、はずかしい。			.776		.640	.567
A27 仲の良い友達が授業に遅れて入ってきて、先生に叱られているのを見たら、はずかしい。			.605		.403	.507
A55 仲の良い友達が、人前で目立つことをすると、はずかしい。			.539		.412	.528
A13 家族の一員がだらしないのを見たら、はずかしい。			.397		.262	.364
A23 人に頼り過ぎたとき、自分が独立した一人の人間ではないように思われて、はずかしい。				.710	.537	.591
A24 辛いことから逃避したとき、他人にどう思われているかが気になり、はずかしい。				.663	.523	.490
A26 自分の感情を抑制出来なくて、外に出してしまったとき、はずかしい。	.319			.526	.389	.460
A08 家庭の状況が、他の家庭よりも劣っていると感じるとき、はずかしい。					.221	
A33 友達に嘘をついたのがばれたとき、後ろめたい気持ちになり、はずかしい。	.308			.313	.228	
A37 外国人に英語で話しかけられて意味が分からなかったとき、自分が情けないと思ひ、はずかしい。					.238	
固有値	4.780	1.196	1.120	.911		
寄与率(%)	23.9	6.0	5.6	4.6		

因子分析の結果、因子負荷量が、.300以上の項目を当該因子を構成する項目とした。なお、複数の因子に負荷している項目については、因子負荷量の絶対値の差が、.05以下の項目を除外した。Table 6 は、この結果を示したものである。最終的に、これらの4つの因子が、「はずかしさ」尺度の下位尺度とされ、それぞれの因子に含まれる項目が、下位尺度を構成する項目とされた。

第1因子に因子負荷量の大きい項目は、「場違いな服装で正式なパーティーに行ったとき、人の視線が気になり、はずかしい」、「授業中寝ていて、起きるひょうしに大きな音を出して、周りの人に笑われたとき、はずかしい」などであった。他者の視線と他者の見下しの双方が混在しているが、いずれも、自分の否定的な面が露呈したときに生じるはずかしさであると解して、第1因子は、〈他者〉と命名された。第2因子に因子負荷量の大きい項目は、「会議や討論の場で誰も発言しないのに自分が発言するのは、はずかしい」、「授業で発表するとき周囲の視線をあびるので、はずかしい」など、自分の行為が人の視線にさらされる場合に生じるはずかしさである。したがって、第2因子は、〈注視〉と命名された。第3因子に因子負荷量の大きい項目は、「仲の良い友達が、間違っただけを言っているとはずかしい」、「仲の良い友達が授業に遅れて入ってきて、先生に叱られているのを見たら、はずかしい」などであり、他人の否定的な面に対して生じるはずかしさである。したがって、第3因子は、〈投影〉と命名された。

〈投影〉によるはずかしさは、橋本（1980）や成田ら（1990）の自由記述の分類には出てくるが、成田ら（1990）や堤（1989）が、取り立てて問題にはしないカテゴリーである。しかし、所属集団や準拠集団とのつながりの濃さというようなわが国の青年の特徴があるとすれば、無視することはできない。第4因子に因子負荷量の大きい項目は、「人に頼り過ぎたとき、自分が独立した一人の人間ではないように思われて、はずかしい」、「自分の感情を抑制できなくて、外に出してしまったとき、はずかしい」などで、自分の否定的な面を自分自身で内省したとき

に生じるはずかしさである。したがって、第4因子は、〈自省〉と命名された。

これらの因子は、井上(1977)と対応させると、〈他者〉は「公恥」に、〈注視〉は「羞恥」に、〈自省〉は「私恥」に、それぞれ、区分されることになる。〈投影〉は「羞恥」に区分されるとも考えられるが、自分と一体化して感じられる他者の振る舞いが、一般化された他者と比べて大変劣っている場合、すなわち「公恥」の場合、あるいは、一般化された他者が所属集団を越えて善悪基準に匹敵するものになっており、それが自己の内に内面化されて、その基準から見て否定的であることが意識された場合、すなわち「私恥」の場合があり、別の文脈で論じる必要があるかもしれない。

各因子について、Cronbachの α 係数を算出したところ、第1因子〈他者〉(5項目)は、.758、第2因子〈注視〉(5項目)は、.715、第3因子〈投影〉(4項目)は、.693、第4因子〈自省〉(3項目)は、.697であった。

なお、各因子(下位尺度)について、性差を検討したが、統計的な有意差は認められなかった。

②因子間相関：この研究において最終的に作成された「はずかしさ」尺度の各因子(下位尺度)間の相互関係をみるために、それぞれの下位尺度の総得点間の相関係数を算出した。相関係数は、それぞれ、〈他者〉と〈注視〉間で、.412、〈他者〉と〈投影〉間で、.406、〈他者〉と〈自省〉間で、.360、〈注視〉と〈投影〉間で、.351、〈注視〉と〈自省〉間で、.305、〈投影〉と〈自省〉間で、.342であった。いずれも、統計的には、1%水準で有意であり、一定の相関があるといえる。堤(1989)が未分化で単一因子的性格を有するという指摘を支持している。「はずかしさ」は、たとえそれが神のような存在であったり、あるいは人類などの大きな所属集団であったにしても、他者の眼を抜きに成立しないことを反映しているのかもしれない。

より詳細に、相対的に、相関の大きさを検討すると、〈他者〉と〈注視〉や〈投影〉の相関が高く、〈自省〉とその他の〈他者〉や〈投影〉や〈注視〉の間の相関がやや低いことも見出される。これは、あるいは、〈他者〉と〈注視〉や〈投影〉との関わりが深く、〈自省〉が他の下位尺度と性質を異にする側面のあることを示しているとも考えることもできる。

(2) 自己意識尺度について

①項目分析と自己意識尺度の構成：自己意識尺度27項目(公的自己意識尺度11項目；私的自己意識尺度10項目；対人不安尺度6項目)について、回答の「非常にあてはまる」に1点、「かなりあてはまる」に2点、「ややあてはまる」に3点、「どちらでもない」に4点、「あまりあてはまらない」に5点、「ほとんどあてはまらない」に6点、「全くあてはまらない」に7点を与えて、得点化した。なお、項目2, 7, 25は逆転項目である。Table 7は、自己意識尺度27項目の項目内容、平均得点、および標準偏差を示したものである。

この得点にもとづいて、主因子法による因子分析を行い、3因子解を得、これによってバリマックス回転を行い、因子負荷量が、.300以上の項目を選び出した。なお、複数因子に負荷している項目については、因子負荷量の絶対値の差が、.05以下のものは除外した。Table 8は、この結果を示したものである。

第1因子に因子負荷量の大きい項目は、「人の目に映る自分の姿に心を配る」、「自分が他人にどう思われているのか気になる」などで、自己の外的・対人的側面に注意を向ける程度をあらわす〈公的自己意識〉の因子である。第2因子に因子負荷量の大きい項目は、「つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている」、「他人を見るように自分をながめてみること

Table 7 自己意識尺度の項目内容, 平均, 標準偏差

項 目 内 容	全体(N=200)		男子(N=99)		女子(N=101)	
	M	S D	M	S D	M	S D
B01 自分が他人にどう思われているのか気になる。	2.60	1.51	2.70	1.61	2.50	1.40
B02* 世間体など気にならない。	3.43	1.57	3.64	1.64	3.23	1.48
B03 自分がどんな人間か自覚しようと努めている。	2.88	1.48	2.64	1.49	3.12	1.44
B04 人に会うとき, どんなふうにするまえば良いのか気になる。	2.85	1.37	2.89	1.39	2.82	1.35
B05 その時々気持の動きを自分自身でつかんでいたい。	2.99	1.50	2.87	1.48	3.10	1.53
B06 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。	2.63	1.38	2.67	1.40	2.59	1.37
B07* 自分自身の内面のことには, あまり関心がない。	2.38	1.43	2.60	1.67	2.18	1.13
B08 人に見られていると, ついかっこうをつけてしまう。	3.48	1.40	3.37	1.42	3.57	1.37
B09 自分の容姿を気にするほうだ。	2.98	1.50	3.25	1.57	2.71	1.39
B10 自分は本当は何をしたいのか考えながら行動する。	3.45	1.62	3.34	1.69	3.55	1.55
B11 ふと, 一歩離れたところから自分をながめてみることもある。	3.19	1.58	2.94	1.57	3.43	1.55
B12 自分についてのうわさに関心がある。	2.71	1.44	2.89	1.55	2.54	1.31
B13 人前で何かする時, 自分のしぐさや姿が気になる。	3.25	1.58	3.52	1.72	3.00	1.40
B14 自分を反省してることが多い。	2.78	1.58	2.63	1.54	2.94	1.61
B15 他人を見るように自分をながめてみることもある。	3.45	1.68	3.21	1.70	3.67	1.64
B16 しばしば, 自分の心を理解しようとする。	3.04	1.53	2.93	1.57	3.15	1.49
B17 他人からの評価を考えながら行動する。	3.44	1.61	3.40	1.67	3.49	1.55
B18 つねに, 自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。	3.50	1.59	3.41	1.67	3.57	1.51
B19 初対面の人に, 自分の印象を悪くしないように気づかう。	2.83	1.51	2.89	1.54	2.77	1.49
B20 気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ。	3.06	1.56	3.13	1.71	2.98	1.41
B21 人の目に映る自分の姿に心を配る。	3.11	1.40	3.20	1.50	3.03	1.29
B22 新しい場面で, すぐにうちとけることができない。	3.50	1.78	3.42	1.82	3.57	1.73
B23 誰かが見ていると, 仕事がやりにくい。	3.33	1.66	3.49	1.70	3.17	1.61
B24 とても当感しやすい。	3.55	1.52	3.65	1.60	3.46	1.45
B25* 知らない人でも平気で話しかけることができる。	3.75	1.77	3.64	1.85	3.86	1.69
B26 人前で話をするのが不安である。	3.99	1.68	4.27	1.74	3.70	1.59
B27 人が大勢いると気にかかってしかたがない。	4.12	1.65	4.15	1.64	4.08	1.67

* は, 逆転項目。

Table 8 自己意識尺度の因子分析結果

項 目 内 容	F 1	F 2	F 3	共通性
	(公的自意識)	(私的自意識)	(対人不安)	
B21 人の目に映る自分の姿に心を配る。	.831			.723
B01 自分が他人にどう思われているのか気になる。	.773			.645
B12 自分についてのうわさに関心がある。	.746			.573
B13 人前で何かする時, 自分のしぐさや姿が気になる。	.692			.543
B17 他人からの評価を考えながら行動する。	.672			.530
B04 人に会うとき, どんなふうにするまえば良いのか気になる。	.628	.360		.570
B06 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。	.608	.305		.494
B09 自分の容姿を気にするほうだ。	.599			.422
B19 初対面の人に, 自分の印象を悪くしないように気づかう。	.531			.325
B08 人に見られていると, ついかっこうをつけてしまう。	.510			.297
B02* 世間体など気にならない。	.444			.222
B18 つねに, 自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。		.829		.696
B15 他人を見るように自分をながめてみることもある。		.814		.665
B11 ふと, 一歩離れたところから自分をながめてみることもある。		.780		.611
B16 しばしば, 自分の心を理解しようとする。		.714		.548
B03 自分がどんな人間か自覚しようと努めている。		.666		.501
B05 その時々気持の動きを自分自身でつかんでいたい。		.659		.462
B14 自分を反省してることが多い。	.389	.601		.513
B10 自分は本当は何をしたいのか考えながら行動する。		.600		.370
B07* 自分自身の内面のことには, あまり関心がない。		.516		.347
B22 新しい場面で, すぐにうちとけることができない。			.773	.601
B26 人前で話をするのが不安である。			.686	.558
B25* 知らない人でも平気で話しかけることができる。			.607	.378
B24 とても当感しやすい。	.351		.564	.457
B23 誰かが見ていると, 仕事がやりにくい。	.321		.499	.353
B20 気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ。	.407	.358		.400
B27 人が大勢いると気にかかってしかたがない。	.386		.432	.338
固 有 値	7.945	3.603	1.500	
寄与率(%)	29.4	13.3	5.6	

* は, 逆転項目。

がある」などで、自己の内面に注意を向ける程度をあらわす〈私的自己意識〉の因子である。第3因子に因子負荷量の大きい項目は、「新しい場面で、すぐにうちとけることができない」、「人前で話をするのが不安である」などで、〈対人不安〉の因子である。

各因子について、Cronbachの α 係数を算出したところ、第1因子〈公的自己意識〉(11項目)は、.920、第2因子〈私的自己意識〉(9項目)は、.891、第3因子〈対人不安〉(5項目)は、.823であった。

②因子間相関：自己意識尺度の各因子間相関は、〈公的自己意識〉と〈私的自己意識〉間で、.383、〈公的自己意識〉と〈対人不安〉間で、.438、〈私的自己意識〉と〈対人不安〉間で、.088であった。〈私的自己意識〉と〈対人不安〉間の相関以外は、すべて統計的に有意($P < .01$)であった。とりわけ〈公的自己意識〉と〈対人不安〉の相関が高かった。

(3) 他者志向性尺度について

項目分析と他者志向性尺度の構成：他者志向性尺度15項目について、回答の「非常にあてはまる」に5点、「どちらかといえばあてはまる」に4点、「どちらともいえない」に3点、「どちらかといえばあてはまる」に2点、「全くあてはまらない」に1点を与えて、得点化した。すなわち、得点が高ければ、他者志向性が高くなる。Table 9は、各項目の平均得点と標準偏差を示したものである。

この得点をもとに、主成分分析を行った結果、固有値1以上を基準にすると、3因子が得られたが、寄与率は、第1因子で42.9%を占めるなど、1因子構造と解するのが適切と判断されたので、1因子構造を採用した。Table 10は、この結果を示したものである。これにより、他者志向性尺度は、因子負荷量の高い13項目によって構成することにして、2項目を除外した。

なお、Cronbachの α 係数は、.905であった。

(4) 「はずかしさ」尺度と他の尺度との相関

「はずかしさ」尺度は、〈他者〉、〈注視〉、〈投影〉、〈自省〉の4つの下位尺度から、自己意

Table 9 他者志向性尺度の項目内容、平均、標準偏差

項目内容	全体(N=200)		男子(N=99)		女子(N=101)	
	M	SD	M	SD	M	SD
C01 自分の考えが周りの人と違っていた場合、周りに合わせようかどうかどうしようかと、いつも考える。	3.02	1.22	2.90	1.25	3.14	1.19
C02 友人から変に思われるのではないかと気になって、思ったことや言いたいことを言えないことがある。	3.14	1.26	3.11	1.31	3.17	1.21
C03 世間体をいつも気にして、他人と自分を比較してしまう。	3.17	1.19	3.11	1.18	3.23	1.21
C04 どんな行動をする時にも、周囲の目が気になる。	3.15	1.14	3.15	1.17	3.15	1.11
C05 友人や、近所の人達から、自分はどう思われているのかとても気になる。	3.34	1.23	3.22	1.30	3.46	1.16
C06 誰もしていないことを自分一人ですることには、戸惑いを感じる。	3.15	1.18	2.79	1.21	3.50	1.05
C07 悪いと分かっているが、周りの人がやっている場合に、つい同調してしまうことがある。	3.18	1.10	3.02	1.14	3.33	1.03
C08 自分の発言を周りの人がどう受け取ったのか、気になることがよくある。	3.67	1.03	3.61	1.06	3.74	1.01
C09 何か大きな失敗をした時、自分の失敗を悔いることよりも、周りが自分のことをどう思ったかということの方が気になってしまう。	3.05	1.21	3.15	1.26	2.94	1.15
C10 周りの友達と何かをするにしても、一緒に行動していなければ、自分だけが外されたような気になる。	2.99	1.17	2.90	1.21	3.07	1.12
C11 人前で自分の意見をはっきりと述べることには抵抗がある。	2.83	1.23	2.68	1.26	2.98	1.19
C12 みんなから嫌われている人とは関わりたくない。	2.98	1.04	2.85	1.09	3.10	.98
C13 友人から何か頼まれたとき、本当は嫌でもはっきりと断れず、つい、いい顔をして引き受けてしまうことがある。	3.54	1.12	3.25	1.22	3.83	.92
C14 仲間が話している話題についていけない時、つい知ったかぶりをして合わせてしまうことがある。	2.98	1.14	2.93	1.21	3.03	1.08
C15 周りの人と違ったことをするより、同じことをしているほうが安心できる。	3.47	1.06	3.31	1.09	3.62	1.00

Table 10 他者志向性尺度の主成分分析結果

項目内容	F 1	F 2	F 3
C04 どんな行動をする時にも、周囲の目が気になる。	.799		
C02 友人から変に思われるのではないかと気になって、思ったことや言いたいことを言えないことがある。	.767		
C01 自分の考えが周りの人と違っていた場合、周りに合わせようかどうかどうしようかと、いつも考える。	.741		
C03 世間体をいつも気にして、他人と自分を比較してしまう。	.733	-.349	
C05 友人や、近所の人達から、自分はどう思われているのかとても気になる。	.732	-.336	
C08 自分の発言を周りの人がどう受け取ったのか、気になることがよくある。	.720	-.367	
C15 周りの人と違ったことをするより、同じことをしているほうが安心できる。	.716		
C11 人前で自分の意見をはっきりと述べることは抵抗がある。	.693		
C10 周りの友達と何かをするにしても、一緒に行動していなければ、自分だけが外されたような気になる。	.642		
C09 何か大きな失敗をした時、自分の失敗を悔いることよりも、周りが自分のことをどう思ったかというの方が気になってしまう。	.623		
C06 誰もしていないことを自分一人ですることには、戸惑いを感じる。	.569	.396	
C13 友人から何か頼まれたとき、本当は嫌でもはっきりと断れず、つい、いい顔をして引き受けてしまうことがある。	.566		
C14 仲間が話している話題についていけない時、つい知ったかぶりをして合わせてしまうことがある。	.562	.369	
C07 悪いと分かっているながら、周りの人がやっている場合に、つい同調してしまうことがある。	.404	.556	.422
C12 みんなから嫌われている人とは関わりたくない。	.381	-.679	
固有値	6.428	1.285	1.034
寄与率(%)	42.9	8.6	6.9

Table 11 「はずかしさ」尺度の下位尺度とその他の尺度との相関

尺度	〈他者〉	〈注視〉	〈投影〉	〈自省〉	〈公的〉	〈私的〉	〈不安〉	〈志向〉
〈他者〉		.412***	.406***	.360***	-.510***	-.218**	-.288***	.464***
〈注視〉			.351***	.305***	-.483***	-.024	-.570***	.633***
〈投影〉				.342***	-.278***	-.068	-.252***	.366***
〈自省〉					-.336***	-.335***	-.233**	.283***
〈公的〉						.383***	.438***	-.744***
〈私的〉							.088	-.079
〈不安〉								-.601***

注1) 公的は公的自己意識、私的は私的自己意識、不安は対人不安、志向は他者志向性を示す。

注2) **は $P < .01$ 、***は $P < .001$ を示す。

識尺度は、〈公的自己意識〉、〈私的自己意識〉、〈対人不安〉の3つの下位尺度から、他者志向性尺度は、単一の〈他者志向性〉尺度から、それぞれ、構成されている。Table 11は、これらの8つの尺度間の相関を示したものである。なお、自己意識尺度については、得点化に際して、得点が低いほどその傾向が強いように設定されている。

〈他者〉については、〈公的自己意識〉、次いで〈他者志向性〉との相関が高い。〈他者〉は、自己の否定的な側面を他者がどのように思うかを意識することによって生じるはずかしさであることから、十分説明され得る。しかし、ここでは、高くはないけれども、〈対人不安〉や〈私的自己意識〉との相関も認められる。〈対人不安〉との一定の関連は、自己の準拠枠が不明確であったり、自己への信頼感の揺らぎがあったり、あるいは他者への信頼感が持てない状況の中で、対人不安が生まれ、これが他者の目を気にする方向へ導くと考えれば、説明することが出来る。それでは、当初には関連性を予測しなかった〈私的自己意識〉との相関は、どのように考えればよいであろうか。もちろん、相対的には、〈私的自己意識〉との相関が最も低かったのはいうまでもない。これは、この研究において、〈私的自己意識〉と〈公的自己意識〉の間にも、一定の相関が存在していることから解釈することができるかもしれない。日本の大学生にあっては、自分自身を自分がみつめる場合、すなわち〈私的自己意識〉といえども、他者

の目を介して、現実化する側面を持っているという視点を採用するのである。

〈注視〉については、特に〈他者志向性〉との相関が高かった。〈対人不安〉や〈公的自己意識〉との相関もかなり高かった。その一方で、〈私的自己意識〉との相関は認められなかった。これらの相関の有無は、〈注視〉が誰かの視線を意識したときにはずかしいと感じる場合であることから、予測通りの結果であったということが出来る。興味深いのは、〈対人不安〉との相関が、「はずかしさ」尺度のどの下位尺度よりも高かったということである。近年、青年期における対人恐怖心性（堀井・小川、1997）が注目され、その中でも、視線恐怖の増加が指摘されるのであるが、これが対人不安の高まりと関連しているとの解釈を支持するものとなっていた。

〈投影〉については、それ程高いものではなかったが、相対的には〈他者志向性〉との相関が最も高かった。〈公的自己意識〉や〈対人不安〉との間にも相関が認められたが、〈注視〉と同様、〈私的自己意識〉との相関は認められなかった。これも予測した通りの結果であった。〈投影〉の場合には、他者の振る舞いが自分のことのように感じられるほど、他者と自己の間に一体感があることが前提とされる。この一体感の上に立って、自分でない他者がはずかしい状況に立った場合であっても、自分自身がはずかしく感じてしまうと考えられる。他者との一体感を求め、他者に合わせて行動する傾向が強い日本の青年に特徴的な反応である可能性もある。

〈自省〉については、他の尺度との非常に高い相関は認められなかった。相対的に高い相関は、〈公的自己意識〉や〈私的自己意識〉との間に認められた。より低い相関ではあったが、〈他者志向性〉や〈対人不安〉との間にも認められた。自分の否定的な面について内省したときにはずかしいと感じる〈自省〉と〈私的自己意識〉との間の相関は、予想通りであったが、〈公的自己意識〉やその他の尺度との相関は、予想を裏切る結果であった。しかし、〈自省〉と〈他者〉間、あるいは、〈私的自己意識〉と〈公的自己意識〉間に、一定の相関が認められることから、ある程度予測できる結果であったということもできる。この結果は、「はずかしさ」尺度の妥当性に対して、疑義があるデータであるという立場から説明することもできる。しかし、われわれは、このような立場を取らず、わが国の青年においては、自分の否定的な面を内省するに際しても、否応なく、他者のまなざしが関与してくる状況にあるという立場を取る必要があるのではないかという解釈の方向を提案したいと考える。わが国においては、はずかしいと感じる前提に、たとえ〈自省〉であったにしても、他者の存在があるとも考えることではないであろうか。米国では、親和動機と達成動機が負の相関を示すのに対して、わが国においては、両者が正の相関を示すと言われるのと同様な実態があるのではないであろうか。また、Fromm (1976) は、〈もつこと〉と〈あること〉を対比するのであるが、これと関わる検討において、わが国の青年の〈充実感〉が〈もつこと〉に引きずられている、すなわち〈もつこと〉なしに〈充実感〉を覚えることが大変困難である現実があると考えられるのであるが、われわれの資料は、このような検討と関わっている資料であるということができるかもしれない。

要 約

この研究においては、まず、①「どのような場面」で、「どのような理由」で、はずかしさ (shame) を感じるかを問う、大学生 (110名) に対する自由記述調査に対する回答をもとにし

て、暫定的な「はずかしさ」尺度を構成するとともに、「はずかしさ」の諸側面（下位尺度）を明らかにした。次いで、②大学生（200名）に対して、作成された暫定的な「はずかしさ」尺度による調査を実施し、回答を吟味することを通して、「はずかしさ」尺度をより洗練し、その諸側面（下位尺度）についても再吟味した。最後に、③こうして作成された「はずかしさ」尺度について、同時に実施した自己意識尺度と他者志向性尺度との相関などから、その構成概念的妥当性と信頼性について検討した。

これらの検討の結果として、大学生の「はずかしさ」は、〈他者〉、すなわち自分の否定面に対する他者の反応を意識した場合、〈注視〉、すなわち他者と同一線上になく、他者と相違することによって、他者の視線を意識した場合、〈投影〉、自分と関係のある他者の否定面に出合っ、あたかも自分のことであるかのように感じて、これを意識した場合、および〈自省〉、すなわち自分の否定的な面を自分自身が内省したときに意識される場合に生じることが明らかにされた。これらを、井上（1977）の「はじ」の類型と関連づけると、「公恥」と〈他者〉、「私恥」と〈自省〉、「羞恥」と〈注視〉が、それぞれ対応していた。〈投影〉は、井上の類型にはないが、日本人の集団所属のあり方、すなわち集団と自己が一体化した状態が前提とされた上での「公恥」や「私恥」であるといえるかもしれない。このような「はずかしさ」が、日本人あるいは日本の青年に特有のものであるかどうかは、検討の要がある。

「はずかしさ」尺度の構成概念的妥当性については、下位尺度の〈他者〉が、〈公的自己意識〉や〈他者志向性〉との相関が高く、相対的に〈私的自己意識〉との相関が低いこと、〈注視〉が、〈他者志向性〉や〈対人不安〉や〈公的自己意識〉との相関が高く、〈私的自己意識〉との間に相関がないこと、〈投影〉が、同様に〈他者志向性〉や〈公的自己意識〉や〈対人不安〉との間に相関がある一方で、〈私的自己意識〉との間に相関がないこと、〈自省〉が、他の下位尺度と比べれば相対的には高い相関が〈私的自己意識〉との間に見出されることなどから、一定の構成概念的妥当性の存在が示されたといえることができる。しかし、〈自省〉と〈公的自己意識〉や〈他者志向性〉など、あるいは、低いとはいえ〈他者〉と〈私的自己意識〉との間に相関があるということは、今後引き続き、妥当性についての検討を進める必要があることを示している。

「はずかしさ」尺度の信頼性は、十分とはいえないが、Cronbachの α 係数が、その下位尺度について、それぞれ、.758, .715, .693, .697という値であり、項目数が少ないことを考慮すれば、この尺度には一定の信頼性がある、といえることができる。

文 献

- 相川充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.
 青木保 1990 「日本文化論」の変容—戦後日本の文化とアイデンティティー 中央公論社
 東洋 1994 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版会
 Benedict, R. 1946 *The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture*. Boston: Houghton Mifflin. (長谷川松治訳 1972 菊と刀—日本文化の型 社会思想社)
 Cheek, J. M., & Buss, A. H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330-339.
 Edelman, R. J. 1985 Individual differences in embarrassment: self-consciousness, self-monitoring and embarrassibility. *Personality and Individual Differences*, 6, 223-230.
 Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment

- and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Fenigstein, A. 1987 On the nature of public and private self-consciousness. *Journal of Personality*, 55, 543-554.
- Fromm, E. 1976 *To Have or to Be?* Harper & Row. (佐野哲郎訳 1977 生きるということ 紀伊国屋書店)
- Greenwald, A. G., & Pratkanis, A. R. 1984 The self. In R. S. Wyer, Jr. & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition*. Vol. 3. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates, 129-178.
- 橋本恵以子 1980 羞恥感情の研究(1) —大学生を対象に— 聖母女学院短期大学研究紀要, 9, 106-110.
- 橋本恵以子・清水哲郎 1981 羞恥感情の研究(2) —羞恥感情構造の因子分析— 聖母女学院短期大学研究紀要, 10, 88-93.
- 堀井俊章・小川捷之 1997 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, 19, 75-84.
- 飯塚雄一 1995 視線とシャイネスとの関連性について 心理学研究, 66, 277-282.
- 井上忠司 1977 「世間体」の構造—社会心理史への試み 日本放送出版協会
- Kitayama, S., & Markus, H. R. 1994 *Emotion and culture: Empirical studies of mutual influence*. Washington, D. C.: American Psychological Association.
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- Lewis, H. B. 1971 *Shame and guilt in neurosis*. New York: International Universities Press.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 森口兼二 1993 自尊心の構造 松籟社
- 成田健一・寺崎正治・新浜邦夫 1990 羞恥感情を引き起こす状況の構造—多変量解析を用いて— 人文論究(関西学院大学人文学会), 40, 73-92.
- 成田健一 1993 共分散構造分析による羞恥感情を引き起こす状況の構造 東京学芸大学紀要 第1部門, 44, 191-204.
- Niedenthal, P., Tangney, J. P., & Gavanski, I. 1994 "If only I weren't" versus "If only I hadn't" Distinguishing shame and guilt in counterfactual thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 585-595.
- 作道美由紀 1995 日本人の「恥」概念に関する研究 愛媛大学教育学部卒業論文(未公刊)
- 作田啓一 1967 恥の文化再考 筑摩書房
- Sattler, J. M. 1965 A theoretical, developmental, and clinical investigation of embarrassment. *Genetic Psychology Monographs*, 71, 19-51.
- 園原太郎 1934 羞恥心の心理学的研究 心理学研究, 9, 105-148.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度(self consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- Tangney, J. P. 1991 Moral affect: The good, the bad, and ugly. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 598-607.
- Tangney, J. P. 1995 Recent advances in the empirical study of shame and guilt. *American behavioral scientist*, 38, 1132-1145.
- Tangney, J. P., & Fischer, K. W. 1995 *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: The Guilford Press.
- Trafimow, D., Triandis, H. C., & Goto, S. G. 1991 Some tests of the distinction between the private and the collective self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 649-655.
- Triandis, H. C. 1989 The self and social behavior in differing cultural contexts. *Psychological Review*, 96, 506-520.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 恒吉僚子 1992 人間形成の日米比較 中央公論社
- 堤雅雄 1983 羞恥論への予備的考察 島根大学教育学部紀要, 17, 1-7.
- 堤雅雄 1989 人格の二重性の諸相—羞恥心性と対人不安心性を中心として— 島根大学教育学部紀要, 21,

21-27.

Zimbardo, P. G. 1977 *Shyness: What it is, what to do about it*. Massachusetts: Addison-Wesley. (木村駿・小川和彦訳 1982 シャイネス I・II 勁草書房)